

場所論の方法と癒し：サンドプレイ(箱庭療法)表現 考察の一側面

荒木, 正見
日本赤十字九州国際看護大学：教授

<https://hdl.handle.net/2324/1812242>

出版情報：比較思想論輯：比較思想学会福岡支部紀要. 4, pp.11-22, 2002-03-31. 比較思想学会福岡支部
バージョン：
権利関係：



場所論の方法と癒し

—サンドプレイ(箱庭療法)表現考察の一側面—

荒木 正見

序 哲学的場所論の構造

小論は、哲学的場所論を、医学、心理学、教育相談などのさまざまな場面での癒しの過程を考察するひとつの目安とするための試論である。特に小論では、サンドプレイ(箱庭療法)の一症例をとりあげて、解釈に伴う真理性の確認を意識しつつ、方法の手順を論理的に考察することに主眼を置く。

さてこの論文では、その根本的な場所論を、西田幾多郎の考察に求め、それを基盤として考察全体の構図を形作るが、西田幾多郎の場所論の成立とその構造の確認などについては、筆者はすでに各所で論じてきたので、小論では紙幅の関係もあって、詳説を他の機会に譲り、その基本的な構造のみをこの章で確認するにとどめる。

西田幾多郎の理論の基本的な構造を、筆者が事典項目に執筆したもの(中村元監修・峰島旭雄責任編集『比較思想事典』東京書籍、2000年、412～413頁)などを参考にして述べれば、以下のように示すことができる。

(1)「場所」とは唯一・絶対・無限な存在そのものである。哲学的伝統において、「存在」とは本来唯一絶対的な性格を有するものであることはいうまでもないが、その存在そのものを「場所」と呼ぶ西田幾多郎の場合、その構造は究極的な意味での「唯一・絶対・無限性」を意味している。

(2) 場所は唯一・絶対・無限であるから、個物や個々の出来事、個人、個体などの「個」は場所自身の自己限定もしくは自己規定によって成立するといわなければならない。これを「場所の自己限定」と呼ぶことができる。

(3) 同時に、個の成立は全体としての場所に多様性を与え、場所を豊かに発展させ、また、個は全体自身の自己表現として個を通してはじめて全体が認識される。これを「個による場所の限定」と呼ぶことができる。

(4) さらに、この双方における限定は、同時に成立する相互矛盾的運動でもある。しかし、それによってむしろ個と場所との双方の同一性が確保されるといえる。「絶対矛盾の自己同一」という西田哲学独自の概念がここにも成立しているし、この運動は現実的には、歴史や生育史に現れている。すなわち、歴史や生育史に個や場所の同一性、すなわち本質的な意味が示されているはずである。これを、「場所の歴史性」と呼ぶことができる。

以下、この構造を機軸にして考察を進めることになる。

第1章 場所の「唯一・絶対・無限性」と「自己限定性」から 「場所の普遍的意味を考察すること」

序でも述べたように、西田幾多郎の哲学的場所論における場所とは、本来、哲学における伝統的なテーマである「存在そのもの」を意味し、多くの場合それは唯一・絶対・無限な性格を持つことは常識でもある。そこから翻って個々の事物の成立の因果を考えれば、物質的なものであれ、概念的なものであれ、また、夢や希望や理想、イメージといったものでさえ、それらのすべてが「場所の自己限定」の結果であることはいうまでもない。

ところで、場所という全体と個々の事柄というこの構造的関係は普遍的関係であり、仮に場所が特殊な場所になったとしても、その場所とそこに成立する個々の事柄との関係は同様でなければならない。

その視点から個々の場所の持つ普遍的な意味が、そこに成立する個々の事柄の成立に影響を与えていることは十分に考えられる。このように、ひとつの癒しの症例を考察するとき、その癒しのプロセスに関わった場所の普遍的意味が影響を与えたのではないか、というのがこの章での考察のテーマである。

それについて例をあげて考察しようとするとき、それは対象としての症例に場所論の立場から解釈を与えることを意味する。解釈である以上、解釈の真理性が問われるが、それは論理的な解釈の常識として、論理的整合性と頻度性を目安とすることになる。すなわち諸科学や論理学における真理決定と同様、ふさわしい前提や基準に照らしてその基準のどこに位置づけられ、うまく説明できるのか、ということと、経験的に頻繁に現れるものとを真理とみなす、ということを目安にする。

それを意識して、ひとつのサンドプレイ表現に対する解釈を試みる。

ところではじめに、症例全般、ここではサンドプレイを例にして、それを解釈することの危険性と特殊性について確認しておかなければならない。

まず、危険性について確認する。サンドプレイは、あくまで治療の方法として発展したもので、治療成果をあげるこそが主たる目的であり、みだりに解釈するものではない。極端な言い方ではあるが、治療者に解釈能力が無くても、制作者にエネルギーさえ補充されれば、砂によって退行し、枠を意識することで再構成もしくは再統合し、治癒することも可能である。また、解釈の内容を制作者が知ることによって、意識と無意識の全体の構造が悪しき側に変化する可能性も危惧される。まして、アドバイザーの能力が不安定な場合には、その危惧は計り知れない。

このことは、すべての症例に関して言えることでもある。治療も教育相談も、あくまで癒しこそが目的であり、解釈は特殊な場合である。

そのように解釈すべき特殊な場合とは、厳密に症状や心理状態などを判断しなければならない場合である。

社会的には、児童相談所、家庭裁判所、裁判所、警察などのように、治療や教育として用いる場合というよりも、むしろ、現在の心身の状態を判断もしくは判定し、社会的に具体的な処置を決定しなければならない場合などがその典型である。この場合は、その判断が正確さを欠けば当事者には理不尽な事態が生じかねないのである。

もちろん、さまざまな治療や教育相談に携わるものは、職業上の技術や知識として、対象にふさわしい解釈能力が求められる。特に医学的領域は、最新最高の知識が常に要求されるという鋭く責任の重い領域である。特に、対象が総合的な人間であるということは、先鋭化した専門領域が必要であるとともに、また、それらを複合的に統合する視点も要求されることになる。このような時、豊かな解釈能力をもって当たり、その上で改めて、専門領域を設定することも必要になるであろう。かくして解釈そのものに深入りしすぎず治療に徹することを自覚した上で、解釈能力を磨く努力は続けなければならない。

この論文は主にこの後半の、いわば特殊な場合としての解釈を行う際に、どのように解釈し、何を以って真理と為すかについて、サンドプレイの症例を通じて論じることになる。

さて、ここで場所の自己限定の例としてサンドプレイ解釈を示すのは、それが例として分かり易いからである。すなわち、サンドプレイの解釈をするということは紛れもなく、砂箱という場所に表現された意味を探ることに始まるからである。

が、ここで、サンドプレイおよびサンドプレイを利用した教育相談や治療という行為全体にとって注目すべき概念を指摘し補足しておかなければならない。それは、上田閑照『場所 —

二重世界内存在一』(弘文堂、平成4年)で述べられる「場所の二重世界内存在性」である。これは、「場所」を西田幾多郎の規定に拠った上で、その場所とは、「世界／虚空という二重世界、ないしは世界地平に『地平の彼方』が重なった二重世界地平」(36～37 頁)と述べられるように、我々にとっての世界は、常に、認識される世界と、その彼方の認識できない世界との二重構造を有する、というものである。

この「場所の二重世界内存在性」は、サンドプレイとその解釈にとって特に重要である。先にも述べたように、サンドプレイは本来治療の一手段として開発され発展したもので、治療は肉体のみならず、心理的、社会的に総合的な人間を対象にするため、本質的に総合的な性質を持つものである。しかし、治療の各々が、それぞれの症状に応じて専門領域を設定するように、サンドプレイもその状況に応じて領域を設定しなければならない。その場合、単なる恣意で行うよりは、最も根本的な目安、すなわち存在論的な根拠を基にして確認しつつ行うことが正確な方法だということは言うまでもない。つまり、その専門領域そのものの外に、無限の地平が開け、必要に応じてその無限の領域からの情報を手に入れる心構えが求められる。

小論の場合、目的の端緒はすでに述べたように、表現そのものの意味を解釈することにあった。従って考察の焦点は、砂箱内部の表現そのものにあることは明らかである。この条件に、「場所の二重世界内存在性」を配慮して、解釈すべき図1に関して条件を設定すれば、次のいくつかの条件が指摘される。

例えば、図1の制作の状況は、二十歳前後の、男女の健常者のグループによる教育相談の一環であり、制作者は女性である。病院などにおける治療でもなく、また、制作は個人であるとしても、グループ内で衆人環視のもとで行われるという特殊な状況だということは、後述するように場所の重要な枠組みである。すなわち、今、サンドプレイ表現に着目するとしても、可能な限り、また、状況の許す限り周辺の情報を得ることが正確な解釈に結びつくが、その周辺に関する条件は、先述のサンドプレイの外の世界の諸条件によるものだということを認識して対応しなければならないのである。

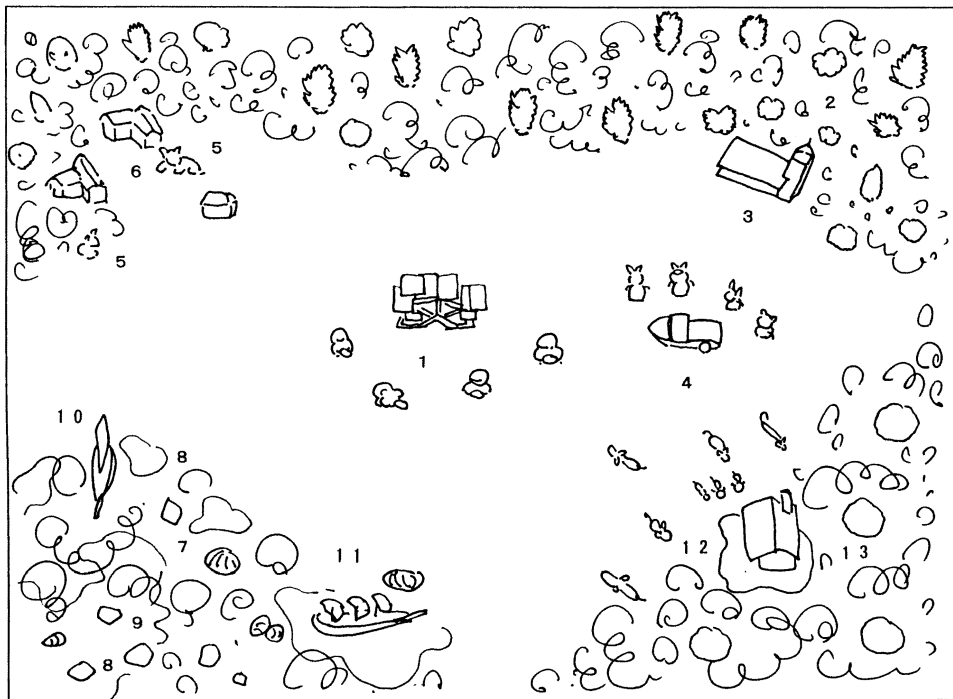


図 1

ただし、真理性に関して作業手順として確認しておかねばならないのは、はじめからすべての情報を並べ立てるわけではない、ということである。後述するように、サンドプレイ表現の情報から、論理的にどれほどのことが言えるのか、を確認し、その結論と、サンドプレイ表現の外の情報とを合わせることで、ひとつの真理性を得ることが可能になるのである。

以下、まずは「場所の自己限定性」を軸として症例を解釈する。

砂箱内の個々の表現を砂箱が限定するというのは、砂箱に表現された場合にすでにそれぞれの場所の意味を被ることを意味する。木村晴子『箱庭療法 基礎的研究と実践』（創元社、昭和 60 年）では、ヨーロッパの筆跡学の伝統などを参照しつつ作成された「空間象徴の図式」として、矩形内部の各エリアの意味が詳細に記してある（18 頁）。また、筆者も同様に、荒木登茂子編著・荒木正見著『心身症と箱庭療法』（中川書店、1994 年）などで、そのような諸研究やサンドプレイ、絵画などの表現例を参考にして、より柔軟な解釈がしやすいよう、やや大まかに各エリアの普遍的意味を考察した（13 頁）。この章では、他の研究を参考にしつつ、筆者の目安を軸にして解釈を進める。

さて「場所の二重世界内存在性」を配慮すれば、図 1 の制作者の制作態度そのものは、一般的な雰囲気ですくすく制作し、時間も 1 時間弱と、一般的なものであった。

また、制作の状況は先に述べたように、二十歳前後の、男女の健常者のグループによる教育相談の一環であり、制作者は女性である。病院などにおける治療でもなく、また、個人的に制作したとしても、グループ内で衆人環視のもとで行われ、成員相互間の関係の詳細が不明という特殊な状況であり、グループの制作の目的は、個々に制作することで日常的な漠然とした不安に対する癒しを得ることであった。

まずこのような枠組みから対応を決定するのが重要なことになる。一般的に個々の表現に隠された意味からは気がかりな点が多々存在するものだが、歴然として緊急に生命の危機を感じる場合以外には、介入はできるだけ避けて、いわば制作者のエネルギーによる自己治癒と自立的発達に委ねるのが危険の最も少ない方法である。

図 1 の場合は特に、グループで目的、すなわち枠を定めて相談に訪れたものであり、それにはそれなりの理由もあるはずだから、気になる点もあったが、後述するように極端に気になったただ一点を、言葉にして象徴的に投げかけるだけにとどめ（この一点が後に大きな本質的意味に繋がったのだが）、あとは、全く解釈のフィードバックは行わなかった。また衆人環視ということを配慮して、日常的教育相談では常識的な、生育史や制作者のプロフィールなどのインタビューも全く行わなかった。すべて、介入による人格改変とプライバシーの侵害を危惧してのことであった。

しかし、実は、制作者の当時の状況は、サンドプレイ表現から感じたように深刻な状況でもあった。すなわち、製作者は、筆者が投げかけたただ一点のことと、その意味と状況を深く考え、後日ふたたび筆者のもとで制作したいと望む契機となるトラブルに巻き込まれていたのである。このことを思えば、もう少し介入しておいてもよかったとも反省するのであるが、それは二律背反だということはいうまでもない。

ともあれ、以下、図 1 の解釈を行うための、社会的な場所の枠は以上の通りである。

さらに、解釈においては、個々のアイテムやモチーフ、テーマなどの個別的な事柄の、普遍的意味を知っておかなければならない。それらは、本来、砂箱という場所とは独立に存在する意味を持ち、それが特定の場所に表現されることで場所に意味を与える。いうまでもなくこれが、次章で考察する「個による場所の限定性」の方向性である。

以下、本章では実際には「場所の自己限定性」と「個による場所の限定性」とを絡ませつつ考察が進展する。なお、「個による場所の限定性」に関係する個々の事柄の象徴的意味については、小論の目的と紙幅の関係上、多くの場合、諸々の象徴事典や象徴解釈などの先行研究を参考にしつつ筆者が経験的にそれぞれの場面でふさわしいと感じた意味のみを記した。したが

ってそれらは本来断定的に述べられるものではなく、すべてに「と思われる」を付加しなければならない性質のものである。勿論それにもかかわらず、解釈全体においては真理性が得られるというのがこの論文のひとつの主題でもある。

さらに序を顧みれば、解釈においてはこの「場所の自己限定性」と「個による場所の限定性」との双方向のダイナミズムが歴史や生育史を形成するという「場所の歴史性」にも配慮しなければならないがそれは次章に委ねて、この章ではやはり必要最小限の叙述にとどめる。

かくしてここから、場所そのものの普遍的意味に主軸をおいた解釈に入るが、図1に関しては次のように説明される。

中央は、表向き見せたいものが現れやすいエリアと考えられる。従って、テーマも現れやすいが、あくまで意識的なテーマであり、意識と無意識の全体のテーマとは異なる場合があることを見逃してはならない。この場合、中央に表現されている楽隊や遊具(1)は、さも楽しそうに見え、今を楽しんでいるようにも見えるが、後に詳しく考察するように、周辺の木綿(もくめん=梱包材)が物を覆い隠すという性質を持ち、それが広範に周囲を覆っていることを配慮すれば、この楽しみは意識的な詐称に近い可能性が高い。むしろ、むりにそのように振舞おうとしているのではないかと考えられる。

右上は、意思や希望、目的、未来、将来などが現れやすいエリアと考えられる。

先に述べた『箱庭療法 基礎的研究と実践』の図式では、この右上のエリアには、「生命と強い対立のゾーン」と記されている。「生命」は、筆者と共通のイメージだといえるが、「強い対立」は、内面の強い緊張を意味し、図式の右方向に「父、将来、Extraversion」と記されるように、その緊張は「意思」につながるものと考えられる。図1の例でも後述するが、このようなゾーンの意味に方向性が重なって、希望につながるのか、希望の阻害、すなわち葛藤につながるのかが判断される。

さて『箱庭療法 基礎的研究と実践』の図式では、その右上の方向性には「火、高尚な観点、目的、終末、死」と記してある。このうち、「高尚な観点、目的」は、そのまま筆者のものと共通だといえるが、「火、終末、死」については次のように考えられる。

「火、終末、死」の心理象徴の意味で共通なのは、いずれもが「死と再生」というテーマに絡むものだということである。Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing co., 1974=邦訳: 山下主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1984)によれば、“death”の象徴的意味として、「ある時期の終わり」と「永遠(immortality)を得るためという意味」と述べられている(p.131)。また、“fire”の一項目には、「死」と記され、それは「殉教(martyrdom)」や「不滅性(immortality)」を意味するとされている(p.188)。このように、これらの意味は、一度終末を迎えながらも、また、新たなより高い次元へと生まれかわることを意味している。それは、人格発達の段階がひとつ上昇すると捉えてもよい。この種の研究の嚆矢のひとつ、河合隼雄『ユング心理学入門』(培風館、1967)でも、「夢分析」の章で最も重要なモチーフとして「死と再生」をとりあげて「心像の世界における「死」は「再生」へとつながるとき、むしろ劇的な変化の前ぶれを示す」(182頁)と述べられている。サンドプレイ解釈においても、死体や骸骨、枯木、枯葉、切株などの表現は、ひとつのことが終わって新しい何かが発生する兆しと捉え、新しい人格発達の兆しを意味する象徴、赤ん坊や動物の仔、芽生えなどの表現を期待する。このように考えれば、「火、終末、死」もまた、意思や希望、目的、未来、将来などを指し示すものだといえる。

図1では、そのエリアに、森と木綿(2)がある。いずれも、無意識的な事柄を表現するものであるが、この意識的な方向性に深い森や、隠蔽的要素の強い木綿を配しているのは、素直に未来に向かうことができない状態だといえる。

そして、その手前に、教会か学校と思われる家(3)を配しているのは、超越的な基準や規則、倫理を求めているといえる。

特にこのエリアでは、先に言及したように、明るい理由で意思を表現するときは、動くものは右を向くことが多いが、逆にここではオート三輪（４）が真ん中の楽隊に向かっていて、なにか閉塞的な状況の中で、楽しい状態をむりに求めていると考えられる。

左上は、生まれ育った家庭や出自、環境などの、現時点での過去のイメージが現れやすいエリアと考えられる。

『箱庭療法 基礎的研究と実践』の図式では、「受身、生命の傍観者のゾーン」と記されており、筆者と相通じる。さらにその方向には、「空気、空虚・光、宇宙への射出、希望、逃避」と記されている。「空気」が「環境」と結びつくのはわかりやすい。また、「宇宙への射出」は誕生を意味するが、図式の左方向に「母、過去、Introversion」と記されるように、右上に関するような新たな誕生というよりは、過去の誕生を意味すると考えるほうがうまく説明できることが多い。このように過去のニュアンスを重ねれば、「空虚・光」も、誕生以前の原初的存在を意味すると考えられるし、「希望」と「逃避」とが、いわば同義的に、母性回帰とでもいうようなニュアンスだということが理解される。

さて図１では、このエリアに、やはり木綿で隠されるように、父母と思われる白熊（５）と三軒の家（６）が置かれている。ここに複数の家を置く時には、往々にしてそれまでの家庭で育てられてきた統合的価値観が揺らいでいることを意味する。また、両親らしき存在が、白熊という動物で表現されたということは、このエリアの表現は退行していると解することができる。すなわち、このエリアからは、退行して、子どもに近い心のレベルに戻り、そこでの統合的家庭イメージが崩れてしまったと感ずることが出来る。つまり、表現者はこれまでの親子関係が崩れてしまったことを感ずている。しかも、そのことを隠そうとしているように見えるのである。

左下は、無意識の深いところの状態が出やすいエリアと考えられる。

『箱庭療法 基礎的研究と実践』の図式では、「発端—後退、初歩の段階の固執、旧式の状態」と記されており、さらにその方向には、「水、発端、誕生、起源」と記されている。このすべては、「始原」を意味しているといえるが、実際のサンドプレイ表現において、この「無意識の深いところ」に示される事柄は、心の奥の契機を意味していると考えて、以降の展開の始原と考えると納得できることが多い。順当なエネルギーが与えられれば順調な展開をもたらすし、エネルギーが枯渇すれば、このエリアに固執したり、そこに戻ってこようとしたりする。

図１の場合、貝やプラスチック（７）で飾ろうとするのは、それだけをとりあげて言えば、希望が持てるという意味だが、この場合は、無意識的な内容を隠そうとする浅い海（８）でもあり、やはり木綿（９）で隠していることの上に重ねてむりに飾ろうという表現である。この場合の船はエネルギーの向かっている方向や無意識的に求めている方向性を表す。一艘（１０）は問題に関する無意識の深層を覗おうとし、もう一艘（１１）は右下のエリアをめざしている。

この右下は、意識無意識全体の本質的意味、つまり本音が出やすいエリアと考えられる。意識的な仮面は取れているので動物的本能にも近づくが、他方、意識的な右領域でもあるので、本能と意識的現実との双方を背負った現実が表現されやすいと考えられる。

『箱庭療法 基礎的研究と実践』の図式では、「刺戟・本能、地—争い、泥（土地）に対する郷愁」と記されており、さらにその方向には、「地、物質、地獄、墮落、悪魔」と記されている。エリアでは、「本能」とともに、本能と現実の関係から「地—争い、泥（土地）に対する郷愁」なども示されるが、方向性としては「本能」それも動物的本能に接近するようである。

実際に解釈する場合には、中心的なエリアにおける意識的テーマと、この右下のエリアにおけるテーマとの共通の意味を求めると、全体のテーマが浮かび上がってくることが多い。

図１の場合、動物に囲まれた家（１２）が置かれているが、それは心が幼児帰りしていると考えられる。そして、この場所に置かれた家なのだから、家庭を強く意識し、しがみつこうとしているといえる。しかしそれも梱包用の紙綿や森（１３）で包み、自分の心を隠し、家庭に対し

て素直にはなれない矛盾や心の傷を感じていることが示される表現になっている。

以上の解釈から、全体として次の事柄が指摘できる。

- 1) 最も特徴的なのは、自分の気持ちを押し込め、なにか大きな問題を隠そうとしている点である。特に、海・森に細かい木綿(もくめん)や紙綿を多量に配しているし、それで全体を包み込もうとしていることから指摘される。
- 2) 全体として、何か、現実を直視できない大きな隠し事に悩み、年齢相応の思考や生活ができない精神的状態にあることがわかる。しかし、表現の合理性や、表現そのものの量的豊かさから、本人の持っている基本的エネルギーやそれまで受けてきた教育の質の高さを感じられ、それゆえに、大きな問題にもかかわらず、精神病、自殺、非行などの危険な道に飛び込まずにやっと踏み止まっているということが推測されるのである。

さて、このように、場所の「唯一・絶対・無限性」は、砂箱自身に本来付随する意味として、個々の表現をはじめから限定する。これまで考察してきたように、それはいわば、個々の表現にとっての運命でもあるかのように個々の事柄に意味を与えるのである。このことは、場所自身が個々の意味を生んでいるというダイナミズムの方向性でもある。

これに対して、個々のアイテムや表現される個々の事柄は、それだけで独立的な意味をもっている。これが「個による場所の限定性」からの方向性である。これらの双方向的ダイナミズムの結果、「場所の歴史性」すなわち、継時的変化が生じる。この側面からの意味づけもまた確認しなければならない。

第2章 「個による場所の限定性」と「場所の歴史性」から「個の意味を考察すること」

前節では、場所の「唯一・絶対・無限性」という視点から、砂箱という場所が本来持つだろうとされるエリアの意味を考察の軸として、表現に対する解釈を行ったが、その際、個々のアイテムや表現される個々の事柄に対して、その固有の意味に配慮したことはいうまでもない。その固有な意味はまた、単なる領野でしかなかった場所自身の意味を豊かにする。これが、「個による場所の限定性」である。

そして、その固有の意味と、場所自身の普遍的な意味が相互に働き合って歴史や生育史が形成される。従って、歴史や生育史から方向性やその本質を見つければ、個々の固有の意味と、場所自身の普遍的な意味との相互限定の働きが見えることになる。これが、「場所の歴史性」の現実的有効性である。

このように、「場所の歴史性」を軸として考察する場合、最も常識的には、ある事柄の歴史を辿り、歴史に潜む方向性から事柄の本質を探るというのが、典型的な方法である。

ところで、図1の症例の場合は、先に述べたように、条件の特殊性とプライバシー保護の立場から、この章ではその生育史や継時的状況を詳細に論じることはできない。

しかし、他方、サンドプレイに限らず、すべての症例を系列的に捉えることは、この「歴史性」に拠って納得できる。すなわち、系列的把握は、場所の普遍性と個別性との相互限定性の流れとしての継時的変化を観察することだといえる。

この制作者は、図1の表現を行った一年十箇月後に、再び筆者のもとでサンドプレイを行うことになる。それが図2である。この図1と図2の間に大きな状況の変化が起こった。それを、読み取ることもまた、「場所の歴史性」という側面からの、ひとつの考察である。

図2において、特徴的なことは、1. 人格発達や成長や自己変革の可能性を持つ無意識の奥に、直視できない大きな問題があり、発達の阻害を招いている点である。2. また、それにもかかわらず図1との比較においては、ある種の癒しが進行しているという点もある。それらが、以下述べるように砂箱に表現されていることを、前章と同様に、各エリアに即して解釈する。

中央は、表向き見せたいものが現れやすいエリアである。この場合、制作のモチベーションが高かったせいで、現在の状態をテーマとして明確に表現している。中央の池（１）は、制作者が最初に作ったものだが、このようにはじめに中央に池を作るのは、多くの場合自分の無意識を知り、人格発達の手がかりを得たいという気持ちを表す。それが素直に現れていれば今後のスムーズな発達が期待できるが、この場合には、その上に大きな橋（２）が置かれ、池を覆うように木綿（３）が置かれている。大きな橋が置かれているのは、なんらかの過渡的な状態を表す。過渡的な状態では、一般に、エネルギーの量もしくは質(全体の構成や構造)が十分にあれば、近々次の段階への発達が期待できるが、エネルギーの量や質に不安があれば、発達が阻害される。図２の表現では、池に怖い爬虫類や恐竜（４）がいて発達を阻害しているが、これは、無意識の奥に、何か原初的で乱暴な問題があり、それが今にも表出しそうなくらい強いので、木綿で隠そうとしているといえる。制作者にとっては、過渡期を越えて変化することは発達に繋がるので望ましいとは感じているが、好ましい変化を阻害する要因があるので、怯えてもいる。それは、池の表現からいえるが、池の周囲の、石と花びらによる二重の輪（５）からもいえる。新たな変化の象徴としてのこの池を花びらという素材や全体を飾りとして表現していることから、飾って評価したいという側面もあるが、石で囲むのは、中の乱暴な衝動や問題が表出ないように押さえ込み、それを悟られないようにみせかけの飾りを作っているという側面がある。中央部分にはこのような無意識の葛藤が強く表れている。車はエネルギーや関心の方向を意味するが、池の周りの２台（６）はいずれも左の無意識方向を向いている。制作者にとって、意識的な現実がというよりは、無意識的な自己の内面を見つめなおさなければという状況である。このような葛藤はエネルギーの消耗を招いてはいるが、人格発達の過程においては付きものであり、むしろ、そのような葛藤は重要なことでさえある。葛藤すなわち心の中の戦いというのは本来、統合や人格発達の欲求があるからこそ起こることだからである。このような葛藤の場面では、エネルギーの量や質(構成)を整えたと、癒しが得られ、より発達した統合に至るのである。

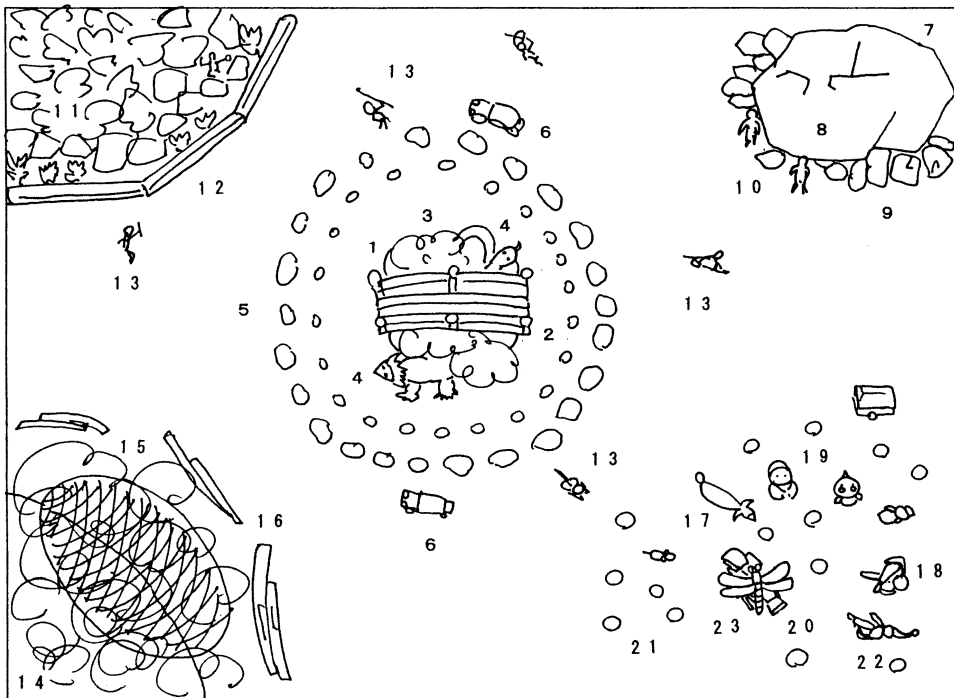


図 2

右上は、意思や希望、目的が現れやすいエリアである。ここにも無意識的な奥行きや発達の可能性を意味する池（7）を作りつつも、巨大な石（8）で蓋をして、ほかの石（9）でさらに覆っている。制作者に聞くと「きれいな水があるところだが、大きな石が邪魔をしている。」とのこと。水着姿の男女（10）が置いてあるのは、男性的要因と女性的要因とが生まれ変わり、未来に向かって、原初的なレベルからやり直したいという意味にとれるが、現在のこの池の状態はそれにしてもまだ阻害要因が大きすぎる、と解釈される。

左上は、生まれ育った家庭の、現時点での制作者のイメージが現れやすいエリアでもあり、また、一般的に過去の問題が現れやすいエリアである。制作者によれば「深い藪（11）に邪悪なものたちが隠れていて、強固な塀（12）の外から退治すべく戦っている（13）」という。ひとつには、子供のころから培ってきた家庭イメージが崩壊しつつあることと、その原因は邪悪なものにかが関与していることを意味している。藪の大きさやその位置、表現の形態などから考えれば、この点の改善はかなりの時間を必要とすると思われる。反面、先の葛藤と同様、戦いのテーマを表現できたということは、可能性もあり、今後、エネルギーの量を確保しつつ、総合的な教育のやり直し、社会に対する価値観の再構築などのエネルギーの質を整える適切なケアを得れば将来的には、ある程度立直れる見通しは残している。

なお、このように、家庭イメージの中に邪悪なものがある、と述べられる場合、現実には家庭の中に、家庭内暴力のような分かりやすい邪悪なものがあるケースもありうる。しかし、それはあくまで間接的な理由であって、このようなイメージ表現の場合ではあくまで「イメージ」のレベルから確認しはじめなければならない。つまり、この解釈のように、自分の心の中の邪悪性、言い換えればそれまでの価値観にそむく自分自身の心の存在から順序良く発展させて解釈し始めなければならないのである。図2の場合、このことは後述するような右下の解釈からも導かれることから、その真理性が確認できる。ここでは簡単に述べておく。先に述べたように、右下は現在の本質の意味が現れやすいエリアだが、このエリアで示されるように、ここでは現実の両親に親近感を覚え、救いを求め、癒されようとしているのである。

左下は、無意識の深いところの状態が出やすいエリアである。海（14）で表現された無意識の奥行きに未来の本当の可能性が示されることが多いエリアではあるが、網と木綿（15）で強く隠している。右上との対比からも、直視したくないことがあり、それで将来の見通しが持ち辛いこと、を強く表現していることになる。また、それがさらに材木（16）で仕切っているのは、いっそう強く押さえ込みたい深い問題があるといえる。

右下は、意識無意識全体の本質の意味が出やすいエリアで、いわば隠れたテーマが表現されやすいエリアである。製作者自身は、羊（17）だそうで、ギターを持っている男（18）が父親、看護婦さん（19）が母親だという。観覧車（20）やビー玉（21）など、明るいのはあるが、どこか現実感に乏しい感じである。それは、表現者自身を羊で表現しているように、退行（幼児帰り）している状態だからである。いわば、子供に戻って家庭にしがみつこうとしているが、その家庭も表面的な平和を装っているにすぎないことを感じている。また、過渡期を表す典型的な象徴を意味するピエロ（22）を置いているのは、真ん中の橋と同様、過渡期にあることを意味している。制作者にとって今は、自分を子供のレベルに置くことによって、問題から逃れようとしているといえる。しかし他方で、観覧車の上のトンボ（23）は、全体を高い視点から見、問題を知的に捉え直し、新しい段階へと癒され生まれ変わろうとしていることも意味しているのである。

かくして、全体として、構造的に、各所でテーマを反復していることがわかる。そのテーマは、中央、右上、右下、左下の各所の表現に繰り返し現れているように、次の発達へのきっかけがあるにもかかわらず、無意識の奥に大きな阻害要因があり、今は大人になるのが困難だと感じていることだといえる。したがって今は、右下に表現されるように羊レベルの幼児にもどって表面だけは明るくみせて生きていかなければならない状態だと考えられる。

ここで、図1と図2を比較すると、図2に至って、以前ほど自分で隠しこんで耐えている様子は減っている。特に、真の現実を表現しやすい右下において、図2では明るくなっているように、比較からはまさに表現できることを喜んでいるようにもみえる。すなわち、戦いのテーマがあるように問題が明らかになり、この、右下の過渡的な状況がよい方向に動いていかなければならないことを表現できる心境に至っている。それはたしかに戦いという激しい葛藤でもあるが、表現できることこそが癒しに結びついているのである。すなわち、図1から図2に向かって、一種の癒しが成立していることが認められる。

しかし将来については、希望や未来を表現する右上を見ると深刻な問題を隠す形で人生をやり直したいと感じている。無意識の深いところで傷ついているし、現実を直視できない大きく深い問題を抱えていることがわかる。当面、本人の持っている基本的エネルギーによって乗り越えてはいるが、未来への心の方向性が生じているだけに、その閉塞状況の実感が現実のものとなりやすい今は、問題が解決しつつあるにもかかわらず、否むしろ癒されつつあることでエネルギーの上昇がみられるだけにホメオスタシスが失われやすく、精神病、自殺などの危険性に留意しつつ対応することが望まれるのである。

さて、解釈の最後に、現実的な問題について言及する。

制作者は図1制作時に、ある事件に巻き込まれていた。その内容については、プライバシー保護の点から述べることはできないが、被疑者が逮捕され、警察から癒しを得る手がかりを、と勧められたとき、真っ先に筆者のもとでサンドプレイを行いたいと意思表示を行ったのである。その理由は、図1制作時に筆者が指摘したことが余りに的中しており、被害を筆者に具体的に打ち明けたかったとともに、筆者のもとで癒されたかったと思っていたことによる。ただし、刑事事件でありすでに警察では長時間、長期間にわたる事情聴取を受けたこともあり、根掘り葉掘り聞くことが癒しに逆行することも危惧して事件には全く言及しなかった。従って、この章の図2の解釈は、この事実の概要のみ知って行ったことを付記しておく。

第3章 サンドプレイ表現解釈の真理性と方法

さて、このように具体的に解釈してきた経緯において、サンドプレイ表現解釈の真理性はどのように形成されているのであろうか。

まず、これまでの解釈の方法的基底を確認する。

全体にわたって行ったことは、個々のデータを論理的に結び合わせて、いわばひとつのストーリーを作るという作業であった。

その場合、個々のデータとは、「場所」という絶対的存在に成立する「すべて」、要するに「すべての事柄」を意味する。しかし、「すべて」を漠然とデータにするわけにはいかないので、一般的には解釈対象を取り巻く諸条件によってデータを選択する。しかし、その諸条件自身が恣意に流れる虞もある。そこでこの章では、根底に哲学的存在論を置き、そのひとつとしての哲学的場所論の方法を、諸条件考察の目安とした。このように、全体の構造を確定すれば、構造のどこに位置するかで真理性の根本は成立する。

しかし、サンドプレイ表現解釈には重大な問題がある。それは、対象が極度に象徴的な性質を持つものだということである。象徴的な性質とは、表現する象徴(symbol)と表現される意味との間に、ひとつの象徴に対して無限の表現可能性を持つことを意味する。もちろんこれは認識の問題であり、すべての表現が本来はこのような性質を持つ。それに対して通常ある事柄に意味を与えようとするときには、意味の体系的地平を前提にして、その地平における論理的必然性を求める。従ってこの論文のサンドプレイ表現解釈においても同様に行わなければならないが、このように極度に象徴的な性質を持つ対象については、前提とすべき体系的地平さえ曖

味な印象を与える。小論での解釈は、この曖昧さをひとつひとつ解消すべく、場所論の諸概念を手がかりにしていくつかの前提を求め、設定しつつ進化した。

現実的な手順を考えればはじめに有効な概念は「場所の二重世界内存在性」である。筆者はそれによって、遂行すべきサンドプレイのスタイルを決定し、それを顧みつつ、この章で解釈すべき枠組みを決定した。「場所の二重世界内存在性」を配慮しつつ翻って言えばそれは、その枠組み以上のことは行っていないし、行えないという自覚を持たなければならないことをも意味する。

次に、この章の解釈の目的としての「場所の唯一・絶対・無限性」と「場所の自己限定性」を前提として、解釈すべき特定の場所の焦点として、砂箱内部の持つ普遍的意味を考察し、それによって、「個による場所の限定性」に基づいて成り立っている表現された個々の事柄の意味に付加されて成立する、症例における意味を考察した。

この場合、個々のモチーフの解釈の妥当性は論理的な常識によってその真理性を求める。すなわち、はじめに砂箱内部の情報のみで解釈し因果性の連続によるストーリーを作っておいて、その中で事実的に確認できることを確認し、それらが妥当していれば、それらと論理的因果性において連続している他の解釈も妥当しているとみなすのである。ここから当然、「場所の二重世界内存在性」を配慮して得る砂箱外の情報も重視しなければならないことになる。また、砂箱内の解釈に、始めから安易に砂箱外の情報を導入してはならないことをも意味する。

「場所の歴史性」も、砂箱外の情報と関連するものである。制作者の生育史や、取り巻く環境、背景となる社会的動向など、何が関係するかわからないので、広範な知識と情報収集力が求められる。また、小論で行ったように、複数のサンドプレイ表現の継時的推移も歴史性考察の手がかりである。

かくして最終的に、総合的な解釈を行うことになるが、それが、現実的な状況と合致しているか、感覚的に受け入れられるものであるかを吟味し、違和感が無くなるまで、すべての作業を繰り返さなければならないことは、いうまでもない。

さらに、今後に向けて重要なことは、このような症例の検討を以降も数多く遂行して、頻度面からの真理性の強化を図らねばならないことであり、解釈のための論理的前提（例えば、人格発達論などのさまざまな心理的前提など）を、その都度有効に用いることができるように数多く理解し備えて、論理的整合面からの真理性の強化を図らなければならないことである。

そして本来、癒しが小論の目的であったことに留意すれば、真の癒しとは何か、どのように実践すればよいのか等の、小論の背景を為す重要な問題については常に追求し続けなければならないことは言うまでもない。

さて、最後に、本章の考察から、一般的な症例考察に繋がる方法を導く。

- 1) まず、考察のすべての場面で以下に留意しなければならない。すなわち、考察の常識として、論理的な真理性とは、頻度性と確固たる構造的 premise に基づく必然性を意識して考察し解釈しなければならない。
- 2) 次に、最も大まかな構造としての「場所の普遍的意味」と「個々の事柄の普遍的意味」との「相互限定」に着目する。この場合、「場所」は、本来「二重世界内構造」を持った唯一・絶対・無限な存在ではあるが、サンドプレイの砂箱の各エリアで見てきたように、特定の場所においても「場所と個の相互限定」は成立する。特に、特定の場所は特定ゆえに意味を持つため、その意味によって個を限定するというダイナミズムを持つ。しかもその意味はその場所特有の最も普遍的な意味である。他方、個は個なりに本来特有の普遍的な意味を持つ。このそれぞれの普遍的な意味同士の相互限定によって、ある場所における個の意味が確定する。
- 3) さらに、上記の「相互限定」は、結果として示されている状態だけからは、その真の意味は把握しにくい。その場合「相互限定」が運動の流れであることに着目し、特に継時的推

移、歴史、成育史などに注目し、その指向的方向性を見定める。ただ漫然と時間的流れを眺めるのではなく、あくまで個と普遍の「相互限定」として観察し、分析することで厳密な方向性と、個々の現象や事柄の意味が見えてくる。

- 4) 最後に、それらすべての意味付けを総合的に捉え、論理的に整理し説明し、必然的な論理の網で覆ってみる。そこで生じた解釈を、現象や事柄の直観的印象と比較し、違和感が生じなければ、この解釈は完結したとみなす。

かくして、今後の症例考察はこのような手順を意識して行うことになる。

直接利用した参考文献

中村元監修・峰島旭雄責任編集『比較思想事典』東京書籍、2000年

上田閑照『場所 一二重世界内存在一』弘文堂、平成4年

木村晴子『箱庭療法 基礎的研究と実践』創元社、昭和60年

荒木登茂子編著・荒木正見著『心身症と箱庭療法』中川書店、1994年

Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery*, North-Holland Publishing co., 1974 山下

主一郎他訳『イメージ・シンボル事典』大修館書店、1984

河合隼雄『ユング心理学入門』培風館、1967

[Method of Topos Theory and Healing on a Case of Sandplay Therapy]

[Masami Araki・日本赤十字九州国際看護大学教授]